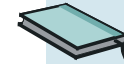


## この本と私



「とれたての短歌です」

俵 万智 著

浅井 慎平 写真



角川書店

「この店を出たなら 消えてしまうから 今この店の会話の重み

「会話」「消えてしまう」「思い」という言葉に惹かれて一気に読んでいました。一昔前話題になった有名な本と記憶しています。本の装丁や写真が目を引き、言葉が先に飛び込んでくる。好きな言葉や気になる言葉に出会って、ゆっくり読んだり、何度も読み返したり。

「ことば」に案内されているように、あちらを読んでは、こちらを繰り返し読む。楽しく読み終えました。短歌は、五・七・五・七・七の三十一文字。文字数や形が決まっている文。しかし、この本は、発行当時、その常識を越えた自由な歌と言われていたと聞き覚えています。読んでいると短歌のようにも思える。文字数を数えてみると・・・全く自由でした。普段の会話から引き出して来たような言葉遣い。古い言い回しもなく、方ぐるしくもなく、そして調子良く。”あつこんな気持ちあつたなあ”と、にっこりしている私がいて、日本語の美しさや楽しさまでも考え始めています。ことばを楽しく使えば『言葉』を感じることも出来るそうです。「語感」を辞書で引くと―ニュアンス、用法、意味の違いを区別する感覚―とあります。ことばの意味に敏感でありたいと願っています。

聰子